

「プロテイノスⅡラヴ 紹介文」

岡和田晃

第2期『エクリップス・フェイズ』シェアードワールド小説企画の第2弾は、伏見健二の新作小説「プロテイノスⅡラヴ」である。

ロックンロール・ミュージックとSFは相性がいい。どちらも一種のカウンター・カルチャーとして、世間の価値観に対し痛烈な「ノン」を突きつけた。どちらも、聴き手／読み手に、他に代えがたい高揚感、「魂」を揺さぶる衝撃を与え、その人生を大きく変えた。

そのロックが重要なモチーフとなる本作は——壊滅前の地球の記憶に囚われた「おれ」の孤独と相俟って——サミュエル・R・レイニーの名作「コロナ」を、最新のガジェットを使って書き直そうという試みのようにも見える。充溢する哀しみは、あたかも名匠の手になるベース・リフがごとき、鮮烈な経験として沁み渡ることだろう。『エクリップス・フェイズ』の豊富なガジェットを手際よく料理しながら、ヒューマニズムとポストヒューマニズムの境界を探り、その本質を提示するのが本作だ。読後、あなたの心

には、「百億人のなかで一人だけ」の一節が、リフレインされるに違いない。なお、本作には設定の一部について、作者が独自に想像を膨らませたところがある。

伏見健二は日本を代表するゲームデザイナーの一人。美大在学中にオリジナルRPG『ブルーフォレスト物語』のデザイナーとして颯爽とデビュー後、同作のノベライズ等で小説家としてもマルチに活躍、小説の著書だけでも、30冊近くにのぼる。

本格SFとしてはバrinton・J・ベイリー流ワイドスクリーン・バロックの知られざる佳品『レインボウ・レイヤー 虹色の遷光』（ハルキ文庫）が白眉だろう。これはスウェーデンボルグ、ジオルダーノ・ブルーノなどの神秘主義的観念論者と本格スペース・オペラを大胆に結びつけた奇想溢れる長篇で、荒巻義雄（ビッグ・ウオーズ）シリーズ、大原まり子『戦争を演じた神々たち』、田中啓文『忘却の船に流れは光』等、日本SF史の正系に位置づけられる。

その伏見健二の感性が『エクリプス・フェイズ』の世界と出逢ったらどうなるか——およそ10年ぶりの新作小説となる本作は、そのような愉しみも与えてくれる。これまで伏見健二の世界に親しんできた方々も、これから彼に出逢う世代も、伏見健二が紡ぐSF世界の、さらなる深化に注目されたい。